

第2部 トークショー／講演（抄訳）

「世界」はもう側まで、来ています！

日本で日本人とそれ以外の人、どう仲良くできるかを考える一歩のために

ロバート キャンベル（日本文学研究者、東京大学大学院教授）

ヘイトスピーチに日本の先が見えるのか

最近、日本社会で問題になっているのがヘイトスピーチです。これは特定の人たちの人権、存在を否定し、排除する言動を指します。私は日本に暮らす外国人として、ヘイトスピーチには敏感でありますし、また日本文学研究者として、日本の歴史文化の中でヘイトスピーチに類似するものがあるかどうかということに、興味があります。そして、過去に日本で行われてきた一見ヘイトスピーチに類似するものと比べ、現在のヘイトスピーチには異質なものを感じています。



ロバート キャンベルさん

ある日曜日のお昼過ぎ、東京の新宿で行われたヘイトスピーチのデモ行進に、新聞記者と共に一緒に歩き、参加者の言動を目の当たりにしました。彼らが主張していることは、ひたすら排他、排除を訴えるものでした。しかも、排除する理由となる彼らの主張に根拠がない。そして彼らの言動からは、その主張を受け入れた日本の将来には何があるのか、また彼らの考える理想の日本とは何なのか、私には分かりませんでした。例えば、幕末の攘夷論^{*注9}は外国人を日本から排除する主張ではありますが、攘夷論者である大橋訥庵^{*注10}や佐久間象山^{*注11}などは、一方で洋学に非常に興味を持っており、国家の安全保障について真剣に考えていました。つまりビジョン（将来像、未来像）を持って、その時点に限り外国人排除へと動いていたのです。これと比べると、現代のヘイトスピーチは、とにかく憎しみを叫ぶことだけに特化したもので、それを聞いた外国人の方たちは、その場に立ち止まったままほとんど動けないほどの衝撃を受けると思います。

行動することで防ぐことのできる人の痛み

東日本大震災後、福島県郡山市にお住まいのイギリス人のアン・カネコさんと知り合いました。彼女は、震災直後にブログ^{*注12}を開設し、福島の人たちがどのようなことを考えて、どのようなことを

*注9：攘夷論（じょういろん）

外国人を力で排斥しようという考え方。幕末（江戸時代末期）に広まり、その後の尊王攘夷思想へと移っていった。

*注10：大橋訥庵（おおはし とつあん）

文化13（1816）年～文久2（1862）年。江戸時代後期の儒学者、尊王論者。幕末の尊王攘夷運動に大きな影響を及ぼした。

*注11：佐久間象山（さくま しょうざん）

文化8（1811）年～元治元（1864）年。幕末（江戸時代末期）の松代藩士（現在の長野県長野市松代町にあった藩）、思想家・兵学者。

*注12：Ann Kaneko's Fukushima Blog

<http://annekaneko.blogspot.jp>

発信したいのかを、英語に翻訳し世界に発信しました。「福島の農家の方たちがすばらしい農産品を作っているのに売れない」など、彼女が見聞きした事実を継続的に発信しています。彼女は、何かを主張するのではなく、客観的な実状やその日に得た様々な感想を皆さんと共有させていただきとブログに綴っています。この取組は、海外のメディアにとって大きな情報源になり、被災地との橋渡しにもなったようです。震災後、福島の現状や正確な情報を日本全国に向けて発信してもなかなか取り上げられない、信じてもらえない中、彼女の行動によって、海外のメディアを通して“福島の人たちの本当の声”を発信することができたのです。

日本社会には、見て見ないふりをする傾向があると思います。私が見学したヘイトスピーチのデモ行進でも、新宿ではたくさんの人たちが行き交っていましたが、皆しらけた表情で見ているだけです。主張するよりも静観することが美德として認識され、それが社会的な力として働く場面もあります。しかし、アン・カネコさんの行動のように、何か介入することで、防ぐことや回避すること、緩和することができる人の痛みや問題もあると思います。最近のヘイトスピーチの問題も同じケースなのです。

江戸時代に示された「共生」の知恵

ここで、漢詩を一首紹介します。『休道他郷多苦辛、同袍有友自相親、柴扉暁出霜如雪、君汲川流我拾薪』*注13。簡単に説明すると、慣れない土地で生活することは苦勞が多いと、愚痴を言うのはしばらく控えましょう。少ない着物を共有するような友達がいれば、自然に親しみ合うこともあるでしょう。厳しい寒さの中、あなたは川の水を汲み、私は山で薪を拾い、朝御飯を一緒に作りましょう。つまり、理屈ではなく、同じ共同体の中でやるべきことを淡々とやっていけば、同化はしないけれど、いつの間にか寄り添って一つの目標に向かって、歩調を合わせることができるだろう、ということを言っています。これは、江戸時代に広瀬淡窓*注14という儒学者が私塾「咸宜園」*注15をつくり、全国から学生が集まって全寮制で生活している中で、年齢や出身がバラバラのため摩擦や誤解が生じ、いがみあっている学生たちに示したものです。全ての人間の対立や問題をこのように解決することは難しいかもしれません。しかし、鎖国をしていた江戸時代にも、違いによる摩擦を越えるための知恵があったことをお伝えしたいと思います。

オリンピック開催を問題解決のきっかけに

昨（平成25（2013）年、平成32（2020）年）のオリンピックが東京で開催されることが決まりました。私は、この発表の前、東京での開催に、世間はどうか感じているのか気になり、フェイスブック（facebook）やツイッター（twitter）を見ました。すると決定する前は、「東北の復興を遅らせてはいけない」「日本にはもっと考えなければならないことがある」などの消極的な意見が目立ちましたが、発表直後には「おめでとう」「やったね」といった意見ばかり。なんて無節操な人たちだろうと思いましたが、「2020年オリンピック開催地、東京決定おめ！原発とか汚染水とかデフレとか解決目標期限ができたね」と書く人も現れたのです。この社会が抱えている問題を、オリンピックをきっかけに解決する。オリンピック開催を期限とし、その期限を自分たちに与えられた一つのプラス、価値

*注13：桂林莊雜詠（けいりんそうざつえい）
道ふを休めよ他郷苦辛多しと 同袍有友り自ら相親しむ 柴扉暁に出づれば霜雪の如し 君は川流を汲め我は薪を拾はん

*注14：広瀬淡窓（ひろせ たんそう）
天明2（1782）年～安政3（1856）年。江戸時代の儒学者、漢詩人。

*注15：咸宜園（かんぎえん）
広瀬淡窓が豊後国日田郡堀田村（現・大分県日田市）に文化2（1805）年に創立した全寮制の私塾。身分、出身、年齢等に関係なく、誰でも入塾できた。

として捉えているのです。そういった意味では、東京で開催することは、日本にとって間違いなくプラスだと思います。

日本社会には、時間的制約のある目標があれば、それに向かって協調していく流れ、思考があると思います。ヘイトスピーチに関しても、オリンピック開催を契機に法整備をどうするのかなど議論されていますが、3・11のアン・カネコさんがいろいろな人々の橋渡しになったように、一つ一つを実際に協働する形が見えるきっかけになりました。

日本社会の中で、自分と異なるものとの共生、協働を自然に可能にしていく。そのためには、オリンピックのようなきっかけや、場を作り増やしていくことが、一つの解決につながるのではないかと考えています。

(抄訳)